

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04689

研究課題名(和文)ニューカマーの次世代育成実践に関する世代間比較研究

研究課題名(英文) Consciousness Formation of the Development of the Next Generation among the Second-Generation Immigrant

研究代表者

児島 明 (KOJIMA, Akira)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：90366956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ブラジル系ニューカマー二世世代がどのように次世代育成意識を形成し、いかなる実践へと向かうのかについて考察した。インタビューを通じて、二世世代の自己形成は親が語る「帰国の物語」への向きあい方と深く関わる事が明らかになった。「帰国の物語」の積極的な継承者もいれば、消極的な継承者もいた。また、「帰国の物語」を否定し日本永住を選択する者もいれば、グローバルな資源の獲得を通じて多国籍なものへと物語を再編する者もいた。これは第一世代と自らの世代の間に横たわる生きる条件の違いを認識する過程でもあり、その過程自体が二世世代が次世代の成長上のニーズを構築するための資源の獲得につながっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くのニューカマー二世世代がすでに次世代を育成する立場にある現状に鑑みて、かれらを教育の対象としてだけでなく教育する主体として捉え、そうした立場から展開される実践の可能性を探究する点が本研究の最大の特徴である。その際、二世世代自身がさまざまな困難や出会いの経験を踏まえていかなる教育観を形成するのかについて丁寧に理解することを重視する。二世世代の教育観及び教育実践の解明は、さまざまな差異を有する子どもに対して日本の教育システムが提供し得てきたものと提供し損なってきたものを明らかにする作業をとまなうがゆえに、諸個人の多様な生き方を支える教育環境がいかに設計可能かを考える上でも重要な意味をもつ。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine how the second generation of Brazilian newcomers form a sense of nurturing the next generation, and what kind of practices they will take. Through interviews, it became clear that the self-formation of the second generation is deeply related to the attitude toward the "family narrative of return" spoken by parents. Some were positive successors of the "family narrative of return" while others were negative. Some denied the "family narrative of return" and chose to live permanently in Japan, while others restructured their stories into multinational ones by acquiring global resources. This was also a process of recognizing the differences in living conditions between the first and their own generations, and this process itself led to the acquisition of resources for the second generation to construct the growth needs of the next generation.

研究分野：教育社会学

キーワード：ニューカマー 二世世代 移行過程 次世代育成 世代間比較 ライフストーリー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

前世紀末以降、「ニューカマーと教育」をめぐる研究は、ニューカマーの子どもたちが学校で直面する諸課題を解明する作業に熱心に取り組んできた。その結果、学校への適応を中心に、対処すべき諸課題が明らかにされると同時に(太田 2000、志水・清水編 2001、児島 2006、清水 2006)、学校内部の権力関係を組み替えていくような実践も紹介されるようになった(清水・児島編 2006)。その一方で、ニューカマーの子どもへの不就学や学校からの早期の離脱にも目が向けられるようになり、そうした事態をもたらす構造的諸要因についても議論が重ねられてきた(宮島・太田編 2005、佐久間 2006)。これらの先行研究により、グローバル化が進行する現代日本社会において学校教育システムが抱える諸課題はかなりの程度明らかになったといえる。

だが他方、先行研究では主として学齢期にある子どもの学校経験に焦点が合わせられていたため、学校を離脱して以降の実態については十分に解明されてこなかった。そこで報告者は過去のプロジェクトにおいて、ニューカマー青年の移行課題をより包括的に理解すべく、離学後の経験を視野に入れた研究に着手した。ここでは、日本での学校経験を有する日系ブラジル人青年を対象に据え、次の三つの課題に取り組んだ。すなわち、第一に、離学にいたる経緯と早期就労の実態把握(児島 2008)、第二に、国境を越える移動をともなう進路形成の実態把握(児島 2010)、第三に、離学後の学び直しとそれを支える教育環境についての実態把握(児島 2014)である。これらの諸研究を通じて、日系ブラジル人という限定つきではあるが、決して直線的・一方向的ではないニューカマー青年の移行過程とそれを支える教育環境(学び直しを支える通信教育等)の存在が明らかになった。

このようにニューカマー青年の移行過程に関する包括的な把握を試みるなかで浮上したのが、日本で暮らす「第二世代」としての彼らの経験の固有性であった。とりわけ家庭における親との葛藤や就学・進学・就職をめぐるさまざまな障壁は、第一世代とは質の異なる困難をもたらし、第二世代の経験の特徴づけていることが明らかになってきた。それと同時に、ほとんどの対象者が調査時点ですでに成人となっており次世代を育成する立場にあるため、インタビューのなかでは第二世代としての経験を踏まえた教育観や実際に携わっている教育実践について語られることも少なくなかった。このような経緯のなかで明確になってきたのが「ニューカマー第二世代による次世代育成」という研究課題である。「ニューカマーと教育」をめぐる現実、すでに第二世代自身が親や教育者になるという段階にきているわけであるが、そうした観点から現在の教育課題を検討した研究は管見の限り見あたらない。他方、アメリカでは移民第二世代に関する研究は盛んになされているが(例えば、Portes and Rumbaut 2001)、学業達成の解明に偏る傾向があり、やはり教育実践者として第二世代を捉える視点は弱い。しかし、多文化共生社会をめざすのであれば、第二世代がどのような教育観に立ち次世代育成を担っていくかの解明は、その試金石にもなりうるきわめて重要な課題であることに間違いはない。

2. 研究の目的

以上の問題意識に立ち、本研究では日本で育ったニューカマー青年を明確に第二世代と位置づけたうえで、第一世代と異なる経験を踏まえて彼らが形成する教育観を明らかにし、具体的な次世代育成実践へのアプローチを通して、多文化教育の担い手としての第二世代の可能性を探求することを目的とした。具体的には以下の二つの課題の解明を主たる目的として調査研究を進めてきた。

(1) ブラジル系ニューカマー第二世代が形成する教育観を第一世代との比較により解明すること。ニューカマー第二世代の教育経験は、家族の来日経緯、親子関係、学校への適応状況等によって大きく左右される。報告者が主な対象とするブラジル系ニューカマーの場合、派遣業者を通じての出稼ぎという親の来日経緯が第二世代の学業継続を困難にし、離学や早期就労をもたらすケースが少なくない。第二世代がそのような経験をどのように意味づけ、自らの教育観を形成していくのかを解明するのがここでの目的であるが、その際、第一世代がもつ教育観に対する第二世代の受容のありように注目し、世代間でのニーズの相違を明らかにする。次世代育成の環境づくりに必要な条件がそこから浮かびあがるからである。これらの課題を主にライフストーリー・インタビューの手法を用いて明らかにする。

(2) ブラジル系ニューカマー第二世代による次世代育成にかかわる意識と実践の現状と課題について第一世代との比較により明らかにすること。第二世代ならではの教育観に立ち、次世代育成の実践にかかわる(かかわろうとする)者は、過去のプロジェクトでの経験からしても決して少なくないと思われる。世代による教育観の違いが教育実践上のどのような特徴として現出するのかを解明し、第二世代による次世代育成実践の可能性と課題について検討するのが本研究の目的である。ただし、ここで留意すべきは、教育の現場を学校教育に限定して捉えないことである。もちろん語学指導員等として学校に入り込んでいる者もいるが、他方で、地域の学習支援教室や各種の多文化活動など、次世代育成にかかわる実践のありようは多様である。第二世代による次世代育成実践の可能性を、その萌芽を含めて適切に捉えるためにも、教育の現場を広義に解釈し、柔軟なアプローチを試みる。

3. 研究の方法

(1) ニューカマー第二世代の人生経歴上の移行過程に影響を及ぼす環境的な要因を内在的に理

解するためのフィールドワークを実施した。具体的に対象としたのは、ブラジル系ニューカマーが多く居住する島根県出雲市において、第二世代の教育支援にかかわる二つのボランティアベースの取り組みであった。NPOが運営するニューカマーの子どもの放課後学習支援教室及び「過年度生」の高校進学を支援する教室に月に1回から2回のペースで参加しながら、第二世代自身や支援にかかわるスタッフの声に耳を傾け、第二世代のスムーズな進学を妨げる要因について理解を深めた。同時に、支援活動に継続に携わってきたスタッフ(日本人のみならずブラジル人第一世代及び第二世代も含まれる)へのインタビューも実施し、彼らが活動を通じてどのような意識や実践上の変化を経験したかについても目を向けた。

(2) 本研究の主題であるブラジル系ニューカマー第二世代の次世代育成意識の形成過程を理解するにあたっては、ライフストーリー・インタビューを重視した。ライフストーリー・インタビューの手法を用いるのは、次世代育成に向けた教育実践の基盤となる教育観の形成は、来日経緯、親子関係、就学、就労等の条件が密接に絡むなかでなされるため、当事者の人生経歴について時間をかけて包括的に把握する必要があるからである。本研究では、世代間の経験及びその捉え方の相違が第二世代の教育観の形成にどのように影響するかを解明することが重要な課題となるため、インタビューの際には世代間比較の視点を盛り込んだ質問項目を準備した。調査対象者は、本研究と連続性をもつ前回の科研費プロジェクト(平成26~28年度、基盤研究(C)「ニューカマー青少年の学び直しを支える教育環境設計に関する研究」、研究代表者:児島明)を通じて構築したネットワークを活用しながら機縁法的に増やしていき、6名を新たに得た。本研究では、この6名に前回プロジェクトでの対象者18名を加えた24名(男性9名、女性15名)を分析対象とする。インタビューは調査者が協力者の居住地(東京、神奈川、愛知、岐阜、兵庫、島根、沖縄)に赴いて実施した。所要時間は1人あたり2時間~5時間であり、すべて日本語でおこなった。協力者の年齢は19~31歳で、日本生まれの1名を除く23名は小学校段階までに来日しており、うち学齢期前の来日は17名であった。

4. 研究成果

(1) 本研究ではまず、ブラジル系ニューカマー第二世代が、親から示される「帰国の物語」(=日本での生活をいずれ帰国するまでの一時的なものとする納得の枠組み)をどのように受けとめながら、自らの生き方を模索しようとするのかについて、2歳で来日して以降、学齢期を一貫して日本の公立学校に通って過ごし、大学さらには大学院への進学を果たしたマリアーナさん(仮名)の生活史を手がかりに考察した。マリアーナさんの生活史からは、トランスナショナルな生活と教育達成との関連について以下の三点が浮かびあがった。

第一に、マリアーナさんは、出稼ぎ意識を保持し続ける親のもと、将来的な帰国を見据えた「帰国の物語」を親と共有しながらも、ある程度の緊張関係を保ちながら学校生活を送ってきた。親が日本の学校に通うマリアーナさんに学習面等で具体的なサポートをすることはできず、また、高校や大学への進学を積極的に奨励するというはななかったが、少なくとも義務教育段階では、学校に休まず通い、まじめに勉強することには価値をおいていた。他方で、ポルトガル語については母自らが指導にあたるなど積極的な継承がなされ、中1では英語習得のため公文に通わせていた。以上からすれば、マリアーナさんの親がとった教育戦略は、志水・清水編(2001)において南米系ニューカマー家庭の教育戦略として抽出された三つの特徴、すなわち、積極的な母語・母文化継承、日本文化伝達の場としての学校への期待、市場価値のある言語習得の奨励に、概ね合致したものと見えるだろう。

第二に、こうした「帰国の物語」は、第二世代に対してつねに移動を意識しながらの生活を強いるため、マリアーナさんにおいてもとりわけ学業継続をめぐる不安要因を生みだしていたが、その一方で、移動をめぐる意義や価値の形成にも開かれていた。たとえば、いじめによりブラジル人であることに消極的になっていたマリアーナさんは、小5のブラジル訪問を機にブラジル人らしさを肯定的なものとして再定義することで、友人関係における自らの位置取りを変えると同時に、ブラジルに暮らす親戚とのつながりを維持するための努力を積極的におこなうようになった。フォナーやスミスが述べるように、ホスト社会において同化圧力を感じたり排除を経験している第二世代にとって、トランスナショナルな絆は、しばしばセーフティネットとして働き、抵抗のための資源形成に寄与しうるのである(Smith 2002)。そして、こうした経験が、マリアーナさんの生活をより自覚的にトランスナショナルな方向へと向かわせていったものと思われる。学業面では大学時代の留学、職業面では最初に希望したCA、そして現在希望する研究者や国際機関職員、いずれもトランスナショナルな実践によって特徴づけられるものであるが、その基盤には、「帰国の物語」のもとで奨励された複数言語の習得があることも見過ごすことはできない。

第三に、マリアーナさんの教育達成は、多元的な支えが存在することにより可能になったこともあきらかになった。進学のための最大の障壁は経済難であったが、これについては、奨学金や生活福祉資金などの制度を利用することで克服することができた。進学について親の理解を得ることは容易ではなかったが、信頼できる教師の指導や励ましにより、進学意志を喪失することはなかった。また、学校生活を安定して送るうえで、教会の人間関係は重要な役割を果たしていた。そこで形成されるブラジル人の仲間集団は、日本人をマジョリティとする学校でときとして感じる疎外感を軽減する緩衝材として機能した。また、教会での異世代間の交流を通して培われた大人とのコミュニケーション能力は、学校で教師とかかわる際の障壁を低くした。さらに、全

国にあるいは国境を越えて広がる教会のネットワークは、留学や大学院進学など、新たな地に立つマリアーナさんをさまざまなかたちで助け、「安心感」を提供していた。

(2) 次に目的としたのは、国境を越える移動がブラジル系ニューカマー第二世代の帰属意識の形成や将来展望におよぼす影響について、より多角的に解明することであった。ここでは、ブラジル系ニューカマー第二世代の若者 24 名に対して実施した半構造化インタビューの結果をもとに、帰国をめぐる世代間の経験の相違および第二世代自身の「帰国」経験をめぐる語りに注目して分析・考察をおこなった。得られた知見は大きく三点に整理できる。

第一に、ブラジル系ニューカマー家族の多くが来日の際に携えていた「帰国の物語」は、滞在の長期化にともなっておよそ三通りの展開を見せていた。すなわち、実際に家族での帰国を達成したケース(「帰国の物語」の実現)、帰国を志向ないし逡巡しながら日本での生活を続けているケース(「帰国の物語」の継続)、帰国志向から永住志向へと変わったケース(「帰国の物語」の転換)である。「帰国の物語」が継続される背景には、滞日の長期化にともなって日本でもブラジルでも上昇移動が困難というジレンマに陥っている親自身の事情と、子どもの成長にともなって教育達成や職業達成が家族にとって重要な関心事項になってきているという事情があった。

第二に、第二世代は、第一世代が形成・維持してきた「帰国の物語」に巻き込まれながらも、独自のやり方でそれを相対化しつつ、自らが置かれた現実にあふさわしい距離の取り方を模索していた。親の出稼ぎに正の効果認められる場合、「帰国の物語」は積極的に継承され、第二世代自身の出稼ぎの肯定につながっていた。逆に、親の出稼ぎに負の効果しか認められず、第二世代自身も日本での生きにくさを感じている場合、「帰国の物語」は消極的なかたちで継承され、日本からの脱出を図るための拠り所とされていた。他方、第二世代が「帰国の物語」を否定し永住を志向するケースにおいては、継続された「帰国の物語」を生きる第一世代と自らの立ち位置の明確な差異化がおこなわれる場合と、第一世代自身も日本永住を選択し「帰国の物語」を否定するケースがあった。さらに、第二世代が固有の資源や経験を獲得することを通じて、親がとられる帰国かホスト国への定住かという枠組みを超えた移動の物語へと「帰国の物語」を再編するケースも存在した。

第三に、第二世代が「帰国の物語」に対して示す反応は、親の出稼ぎへの評価だけでなく、第二世代自身の実際の「帰国」経験によっても形成されていた。親族訪問を中心とした観光としての「帰国」であれ、人生観を変えるほどの転機としての「帰国」であれ、ブラジルに対する何らかのイメージを形成し、「帰国の物語」について検討するため材料を提供しようという点では共通していた。観光としての「帰国」は、とりわけ子ども期には親戚からの歓待などを通じて、ある種の心地よさをともなって経験されるが、青年期に入ると、できることが限られることによる倦怠感や違和感がそれに加わることもあった。他方、「帰国」が第二世代の帰属意識を大きく変えた転機として語られることもあった。「帰国」をきっかけにブラジル人の魅力を発見し、かれらに対する帰属意識を強くすることがある一方で、現地の人びととの間で生じた文化的な摩擦がブラジルに対する否定的な感情を引き起こし、帰属意識の喪失をもたらすと同時に、日本への志向を再確認するというケースもあった。また、「帰国」経験が、帰属すべき既存の集団が不在であるとの認識をもたらし、自らが置かれた現実にあふさわしい帰属集団の形成へと第二世代を向かわせる契機となる場合もあった。

(3) では、以上みてきたような第二世代に固有の帰属意識の形成や教育達成のありようは、彼ら自身が次世代を育成する立場に立ったとき、どのような教育観として現れるのだろうか。本研究では、ブラジル系移民第二世代の次世代育成意識の形成を、第一世代が子育ての過程で保持していた「家族の物語」とそれにもとづく教育戦略に対する第二世代の受容・葛藤・交渉の過程として描きだした。具体的には、二組の親子(A母-A娘、B母-B娘)に対して実施した半構造化インタビューをもとに分析・考察をおこなった。A母及びB母へのインタビューとA娘及びB娘へのインタビューの間には約15年の間隔があり、A母及びB母のインタビュー当時の年齢はそれぞれ37歳と46歳、A娘及びB娘のインタビュー当時の年齢はそれぞれ30歳、27歳であった。A娘、B娘とも既婚者であり、A娘は第一子の出産をひかえ、B娘には現夫とは異なる男性との間に生まれた8歳になる息子がいた。得られた主な知見は以下の二点である。

第一に、第二世代は親世代が保持する「帰国の物語」とそれに基づいて選ばれる教育戦略の影響下にあるのは確実であるにしても、その影響の仕方は必ずしも親の想定するものではなかった。親世代にとって諸々の教育戦略は帰国後の生活機会の拡大を期待して選択されたものだったが、第二世代にとってはしばしばまったくちがう文脈で経験されていた。A娘の場合、日本の学校に通うことは「日本文化」からいかに脱却するかという課題を彼女にもたらし、英語習得は日本にもブラジルにもこだわらないキャリア形成の見通しへと彼女を導いた。B娘の場合、日本の学校に通うことで身につけた文化的内容への事後的な気づきは「ブラジル文化」からの隔たりの感覚を彼女にもたらし、日本での居住志向につながっていた。いずれにしても、親が「帰国の物語」に依拠して選ばれる教育戦略を、第二世代はかれらに固有の文脈において生きることにより、「帰国の物語」によっては納得や克服の困難な「育ちのニーズ」を自覚し、それに向き合っていた。それは同時に、親世代と自らの世代との間に横たわる生きる条件のちがいを明確に認識することでもあった。

ただし、ここで急いで付け加えなければならないのは、第二世代は親世代との経験のちがいのみを認識するわけではないということである。帰国経験をきっかけに母の困難を環境的要因に

より必然的に生じるものとして理解するようになったB娘の事例にあるように、第二世代は、さまざまな出会いや出来事をきっかけとして、親世代の困難を自らの困難と重ね合わせながら共感的に理解し、さらに次世代の経験へと重ね合わせてもいく。このような「社会的関係における、『受苦』的な相互性」(山ノ内 2004, p.46)への感性にも導かれながら、「育ちのニーズ」に関する認識は深められていくのである。

第二に、そのようにして認識された「育ちのニーズ」は、第二世代が成人して「育てる者」として自らを定位していく際に、数少ない有効な手がかりとなる。というのも、「帰国の物語」を生きる親世代の子育ては、帰国を前提としない第二世代が子育てをする際のモデルにはなりにくいからである。「サードカルチャーキッズ(TCK)」に関する文献においてポロックとリーケンは、TCKが直面する困難の一つとして「理想像を失う」ことを挙げる。すなわち、「人生の次の段階では何が待っているのかをすでにその段階にいる人たちを観察し、交流することで学び取っていく」ことが、周囲に限られた年長者しかいないTCKの場合はきわめて困難だということである(ポロック・リーケン 2010, p.221)。このことは、本研究で対象とする第二世代についても概ねあてはまるだろう。だからこそ、自らが認識する「育ちのニーズ」にどう適切に対処しうるかを手がかりにしながら、親世代ではなく自らをモデルに位置づけて子育てに取り組みもうとするのである。A娘とB娘とでは、子どもの学校選択に関して前者がインターナショナルスクール、後者が日本の学校というちがいがみられた。だが他方、両者とも複数の文化の「はざま」を生きる存在であることを肯定的にとらえ、その強みを活かした子育てをしようとしている点では共通している。そして、A娘が「それ(=勉強を好きになるためのモデル)を自分の子にちっちゃいころから見せてあげたい」と語り、B娘が「私みたいな子をつくっていきいたい」と語るように、自らを次世代にとってのモデルと明確に位置づける点でも両者は共通していた。

これらの知見をふまえて最後に論じなければならないのは、第二世代を教育する主体として位置づけ、かれらが形成する「育ちのニーズ」およびそれをふまえた次世代育成意識のありようを理解することが学校教育ならびに教育研究に対してもつ意味である。第二世代が形成する「育ちのニーズ」の中心に、かれらが日本の学校に通うことで経験したさまざまな困難があるのは疑いがない。その意味で、「育ちのニーズ」およびそれをふまえた次世代育成意識には自ずから現行の学校教育のありように対する批判が内在している。第二世代が提起するこうした批判は、本質化された「人」や「文化」の立場からなされるものではないことは、本研究を通じてあきらかである。むしろ、そのような立場からは理解しえない困難のありようを「育ちのニーズ」は表現しているのであり、学校教育が自らを子どもの成長を疎外する場としないために、すなわち真に公共性を体現する場であるために、真摯に耳を傾けるべき声といえるだろう。

<引用文献>

- ハンナ・アレント、人間の条件、筑摩書房、1994
- 児島明、ニューカマーの子どもと学校文化 日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー、勁草書房、2006
- 児島明、在日ブラジル人の若者の進路選択過程、和光大学現代人間学部紀要、第1号、2008、55-72
- 児島明、国境を越える移動と進路形成、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)、第7巻、第2号、2010、253-283
- 児島明、在日ブラジル人青年の学び直し、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)、第11巻、第2号、2014、57-88
- 宮島喬・太田晴雄編、外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題、東京大学出版会、2005
- 小内透編、在日ブラジル人の教育と保育 群馬県太田・大泉地区を事例として、明石書店、2003
- 太田晴雄、ニューカマーの子どもと日本の学校、国際書院、2000
- デビッド・C.ポロック、ルース=ヴァン・リーケン、サードカルチャーキッズ 多文化の間で生きる子どもたち、スリーエーネットワーク、2010
- Portes, A. and R.G. Rumbaut *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 2001
- 佐久間孝正、外国人の子どもと不就学 異文化に開かれた教育とは、勁草書房、2006
- 志水宏吉・清水睦美編、ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって、明石書店、2001
- 清水睦美、ニューカマーの子どもたち 学校と家族の間の日常世界、勁草書房、2006
- 清水睦美・児島明編、外国人生徒のためのカリキュラム 学校文化の変革の可能性を探る、嵯峨野書院、2006
- Smith, R.C. "Life course, generation, and social location as factors shaping second-generation transnational life" in Levitt, P. and Waters, M. (eds.), *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 2002, 145-167
- 山之内靖、受苦者のまなざし 初期マルクス再興、青土社、2004

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 児島明	4. 巻 10
2. 論文標題 ニューカマー二世世代のトランスナショナルな生活と教育達成 日本の大学を卒業したあるブラジル人女性の経験に注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域教育学研究	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 児島明	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 ブラジル系ニューカマー二世世代の「帰国」経験	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 145-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 児島明	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 ブラジル系移民二世世代の次世代育成意識の形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 児島明
2. 発表標題 ブラジル系ニューカマー二世世代の「帰国」経験
3. 学会等名 日本教育社会学会第69回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 児島明
2. 発表標題 ブラジル系移民第二世代の次世代育成意識の形成
3. 学会等名 日本教育社会学会第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考